

史跡旧二条離宮 (二条城) ・ 平安宮廩院跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報

二〇〇四

一三

史跡旧二条離宮 (二条城) ・ 平安宮廩院跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮 (二条城)・平安宮廩院跡

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび公共下水道埋設工事に伴う史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成17年2月

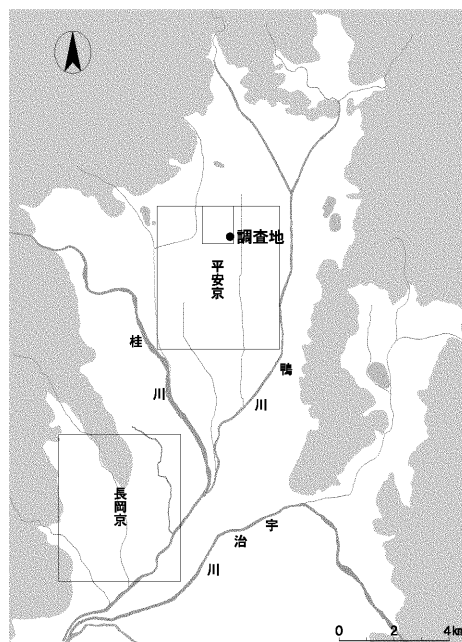
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 史跡旧二条離宮 (二条城)・平安宮廡院跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市中京区堀川通竹屋町西入二条城町地内 |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市公営企業管理者 上下水道局長 吉村憲次 |
| 4 調査期間 | 2004年9月13日～2004年11月8日 |
| 5 調査面積 | 43m ² |
| 6 調査担当者 | 尾藤德行 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「聚楽廻・壬生」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 日本測地系(改正前)平面直角座標系 (ただし、単位(m)を省略した) |
| 9 使用標高 | T.P.:東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点(一級基準点)を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 挿図の土器類・瓦類の順に通し番号を付した。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 16 本書作成 | 尾藤德行 |
| 17 編集・調整 | 児玉光世・大立目 一 |

(調査地点図)



目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺跡の環境と周辺の調査	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	2
3 . 遺 構	3
(1) 基本土層と遺構の概要	3
(2) 第 1 面 (江戸時代末期から明治時代)	3
(3) 第 2 ・ 3 面 (江戸時代前期から後期)	5
(4) 第 4 ~ 6 面 (桃山時代から江戸時代初期)	8
4 . 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
(2) 土器類	10
(3) 瓦 類	11
5 . ま と め	12

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	第 2 面全景 (東から)
		2	第 3 面全景 (西から)
図版 2	遺構	1	第 5 面全景 (東から)
		2	第 6 面全景 (東から)
図版 3	遺構	1	北壁断面 (南から)
		2	東壁断面 (北西から)
図版 4	遺物		出土遺物

插图目次

图1	調査位置図(1:5,000)	1
图2	調査前風景	2
图3	作業風景	2
图4	北壁・東壁断面図(1:50)	4
图5	第1面遺構平面図(1:100)	5
图6	第2面遺構平面図(1:100)	6
图7	石列1・柱列2・柱列3実測図(1:50)	7
图8	第3面遺構平面図(1:100)	8
图9	建物4実測図(1:100)	8
图10	第5面遺構平面図(1:100)	9
图11	第6面遺構平面図(1:100)	9
图12	路面3構築土出土遺物実測図(1:4)	11
图13	溝6・整地層33出土土器実測図(1:4)	11
图14	軒丸瓦拓影・実測図(1:4)	12

表目次

表1	遺構概要表	3
表2	遺物概要表	10

史跡旧二条離宮 (二条城) ・ 平安宮廩院跡

1 . 調査経過

京都市中京区竹屋町通堀川西入二条城町地内の竹屋町通内で公共下水道埋設工事の計画が持ち上がり、縦坑部分の発掘調査を実施することとなった。本調査は2002年度の調査に続く2次調査である。調査位置は二条城の北側で、2002年度のB区から約160m西に位置する。調査地は、史跡旧二条離宮(二条城)内にあり、平安時代には平安宮廩院の北端に位置する。調査地は史跡旧二条離宮(二条城)にあたるため、文化庁、京都府・京都市文化財保護課の指導を仰ぎながら調査を進めることとなった。発掘調査は、2004年9月8日に現地打ち合わせ、13日調査区設定、調査現場事務所設営、14日に重機でアスファルト・表土を搬出し、15日から人力により遺構の掘り下げを開始した。調査面積は南北約4.7m、東西約9.2mの約43㎡である。調査は、近代の路面の検出、写真撮影・実測作業を行い、順次、下層の調査を進め、最後に断面断ち割り調査を行い、10月27日に調査を終了した。その後、撤去作業などを行い、11月8日にすべて終了した。

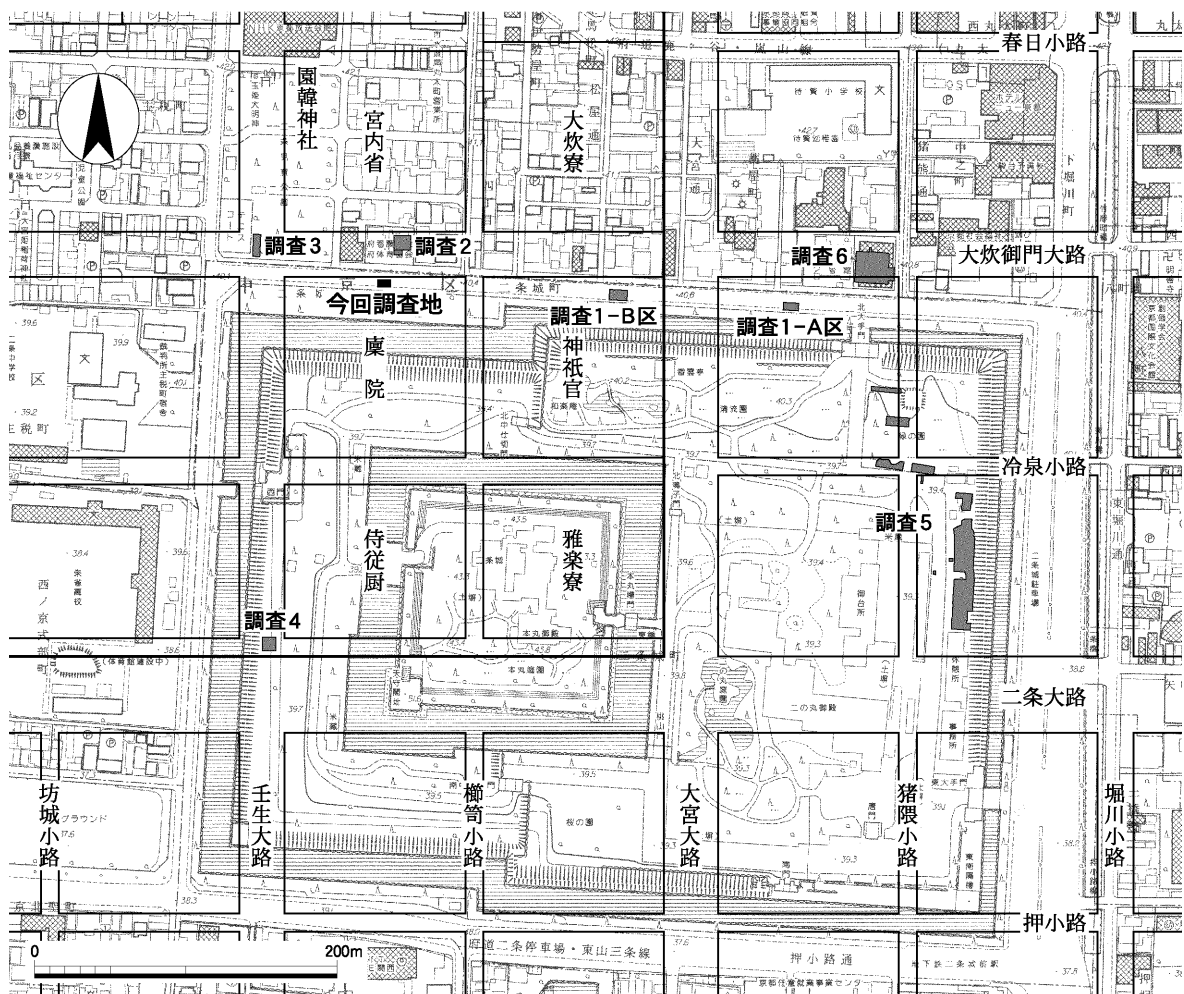


図1 調査位置図(1:5,000)

2 . 遺跡の環境と周辺の調査

(1) 位置と環境

調査地は二条城の北西に位置し、史跡旧二条離宮（二条城）にあたる。二条城は、徳川家康によって慶長8年（1603）に築かれた城で、昭和14年（1939）史跡に指定され、平成6年（1994）には世界遺産に登録されている。安土桃山時代には、調査地の北方に豊臣秀吉が創建した聚楽第と、それをとりまく武家屋敷があったとされている。また、平安時代には、平安宮内の民部省付属の倉庫で諸国から貢進された庸米を収納する廩院跡の北端に位置する。

(2) 周辺の調査

調査地周辺では多くの調査が行われている。今回の調査地に近い主なものと、二条城内の主なものを記す。2002年度に実施した1次調査¹⁾（図1 - 調査1）のA区（約300m東）では大正・明治・江戸時代の路面・側溝・柱穴、室町時代や平安時代の土壌・整地層などを検出し、B区（約150m東）では江戸時代の路面と柵、桃山時代の溝・土壌、鎌倉時代の井戸などを検出している。また、今回の調査区から北30m、東10mにおける2001年の平安宮宮内省跡の発掘調査（調査2²⁾）では江戸時代の溝・柱穴・井戸・土壌、桃山時代の溝、平安時代の土壌・溝などを検出している。また、調査区北西の二条児童公園南端での発掘調査³⁾（調査3）では、江戸時代の南北「濠」や室町時代の遺構を検出している。220m南の二条城内の発掘調査（調査4⁴⁾）では、江戸時代の整地層・土壌、室町時代の溝、平安時代の柱穴などの遺構を検出している。さらに、二条城内北東部の2001年度の調査⁵⁾（調査5）は冷泉院にあたり、平安時代の池と景石・溝・井戸・柱穴、中世の溝・井戸・柱穴、江戸時代の建物・井戸など多くの遺構を検出している。また、北大手門北側の発掘調査⁶⁾（調査6）では平安時代の犬吹御門大路の路面と南側溝、冷泉院北内溝を検出している。

このように、調査地周辺の変遷を示す重要な発掘調査が実施されており、今回の調査も関連遺構の検出が期待された。特に調査1～4を参考に、江戸時代と廩院に関連する平安時代の遺構などを主眼に、調査を進めた。



図2 調査前風景（東から）



図3 作業風景

3 . 遺 構

(1) 基本土層と遺構の概要

基本土層は、地表面より - 50cmまで現道路のアスファルト・砕石層、 - 50 ~ 60cmが昭和以降の竹屋町通の旧路面である。 - 60 ~ 85cmが江戸時代末期から明治以降にかけての路面（第1面）、 - 85 ~ 100cmまで江戸時代前半期から後半期の路面が3面（第2 ~ 4面）続く。 - 100 ~ 120cmは江戸時代初頭の整地層（第5面）、 - 120cm以下は桃山時代から江戸時代初頭の土取穴（第6面）、 - 140cm以下は無遺物層の黄褐色粘土層となる。江戸時代の遺構が多く、第1面で路面3・溝4、第2面で路面5・石列1・柱列2・柱列3、第3面で路面25・建物4、第4面で路面32、第5面で整地層33・溝34を検出した。

調査区は史跡旧二条離宮（二条城）にあたるため、1次調査B区を参考に、明治・大正の路面より調査を開始したが、非常に硬く締まっていたため機械力で掘削し、江戸時代末期から明治にかけての路面の調査を開始した。各土層の堆積状態は、東西にほぼ水平で、南方に少し低く傾斜していた。これは、1次調査のB区とよく似た堆積状況である。

(2) 第1面（江戸時代末期から明治時代）

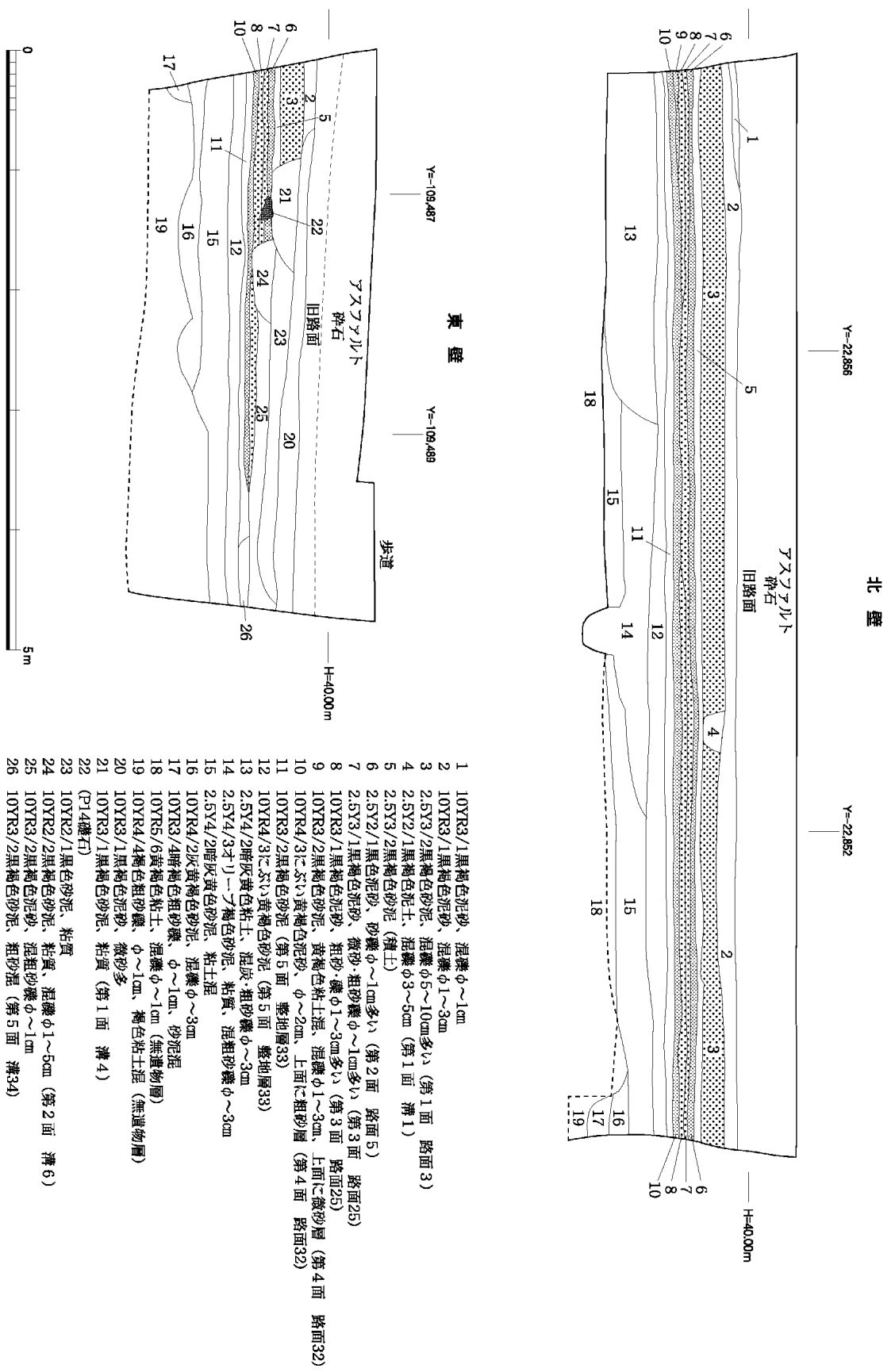
第1面（図5）で検出した遺構には、調査区の北側で検出した路面3がある。1次調査B区のように江戸時代末期の19世紀から明治時代以降にわたる道路敷きで、路面に伴い南側には東西溝4、溝の肩口には杭跡などを検出し、これらの遺構を横切る南北溝1や土壇2を検出した。

南北溝1は路面3と溝4を南北に横切り、土壇2とともに、埋土からガラス片が出土している。路面よりも新しい明治時代以降のものと考え

路面3の構築土は、5層（黒褐色砂泥）を厚さ5cm積み、その上に3層（黒褐色砂泥・混礫5 ~ 10cm）を厚さ20cm盛土して構築されている。B区と異なり上下の路面より礫が大きく、厚い路面である。溝1から東側の路面には遺物が多く混じる。改修工事で埋められたか、上層の路面の

表1 遺構概要表

時 期	検出面	遺 構
桃山時代 ～江戸時代初頭	第6面	土取穴35
	第5面	整地層33・溝34
	第4面	路面32・柱穴
江戸時代前期～後期	第3面	路面25・建物4
	第2面	路面5・溝6・石列1・柱列2・柱列3
江戸時代末期以降	第1面	溝1・土壇2・路面3・溝4



- 1 10YR3/1黒褐色泥砂、混礫φ~1cm
- 2 10YR3/1黒褐色泥砂、混礫φ1~3cm
- 3 2.5Y3/2黒褐色砂泥、混礫φ5~10cm多い (第1面 路面3)
- 4 2.5Y2/1黒褐色粘土、混礫φ3~5cm (第1面 溝1)
- 5 2.5Y3/2黒褐色砂泥 (積上)
- 6 2.5Y2/1黒色泥砂、砂礫φ~1cm多い (第2面 路面5)
- 7 2.5Y3/1黒褐色泥砂、微砂・粗砂礫φ~1cm多い (第3面 路面25)
- 8 10YR3/1黒褐色泥砂、粗砂・礫φ1~3cm多い (第3面 路面25)
- 9 10YR3/2黒褐色砂泥、黄褐色粘土混、混礫φ1~3cm、上面に微砂層 (第4面 路面32)
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、φ~2cm、上面に粗砂層 (第4面 路面32)
- 11 10YR3/2黒褐色砂泥 (第5面 整地層33)
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (第5面 整地層33)
- 13 2.5Y4/2暗灰黄色粘土、混成・粗砂礫φ~3cm
- 14 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、粘質、混粗砂礫φ~3cm
- 15 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、粘土混
- 16 10YR4/2灰黄褐色砂泥、混礫φ~3cm
- 17 10YR3/4暗褐色粗砂礫、φ~1cm、砂泥混 (無遺物層)
- 18 10YR5/6黄褐色粘土、混礫φ~1cm、褐色粘土混 (無遺物層)
- 19 10YR4/4褐色粗砂礫、φ~1cm、褐色粘土混 (無遺物層)
- 20 10YR3/1黒褐色砂泥、微砂多
- 21 10YR3/1黒褐色砂泥、粘質 (第1面 溝4)
- 22 (P14礫石)
- 23 10YR2/1黒色砂泥、粘質
- 24 10YR2/2黒褐色砂泥、粘質、混礫φ1~5cm (第2面 溝6)
- 25 10YR3/2黒褐色泥砂、混粗砂礫φ~1cm
- 26 10YR3/2黒褐色砂泥、粗砂混 (第5面 溝34)

4 図 (1:50) 断面図・剖示

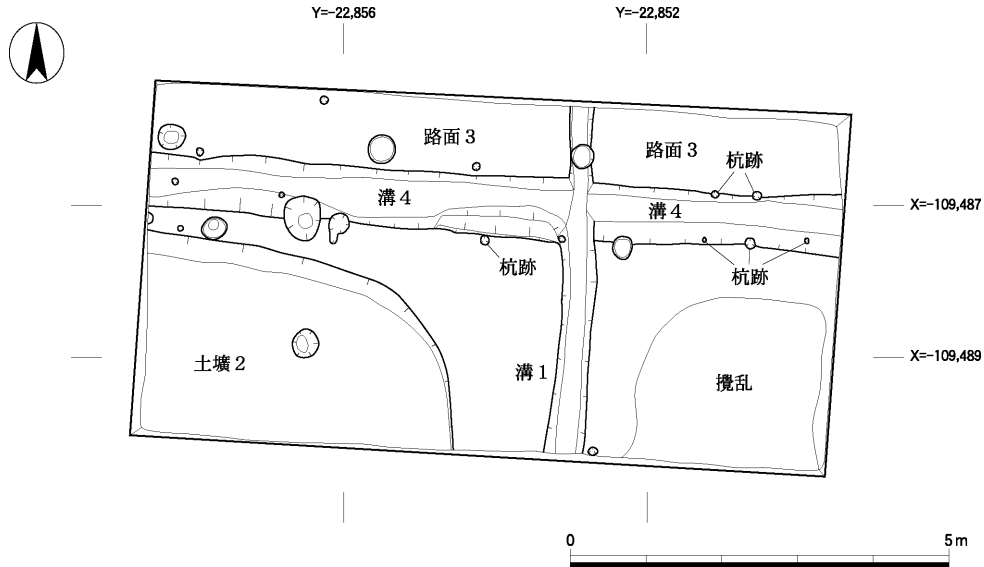


図5 第1面遺構平面図(1:100)

工事前に埋められたものと考えられる。遺物は少ないが、路面3の構築土中からは江戸時代末期の陶磁器類に混じってガラス瓶などが出土している。道路を補修しながら、明治時代以降まで使用していたものと考えられる。

溝4は、路面3の南側溝と考えられる。上部は幅約70cm、底部幅は30~50cm、深さ約20cm、方向軸は現在の道路の南側溝とほぼ平行して約510cm北に位置する。西壁断面でみると、上面の昭和以降の旧路面も同じ位置で溝を踏襲していたことがわかる。B区では、埋土に拳大の礫が多く暗渠的な溝であったが、今回の埋土には砂泥層に微砂が層になって混じっており、流れのあった溝と考えられる。

(3) 第2・3面(江戸時代前期から後期)

江戸時代の路面は、大きく分けて、地表面から-85~90cmの路面5(第2面)、-90~100cmの路面25(第3面)に分けられる。

第2面(図6)では、江戸時代前期に構築されたと推定される路面5である。標高39.5mで調査区の北側の全面で検出し、その南側で路面5の南側溝6を検出した。さらに、路面5南端で石列1を検出し、溝内で柱列2・柱列3を検出した。溝から南側は、砂礫混じりの泥砂層となっていた。路面5の構築土からは遺物はほとんど出土しておらず、時期は不明確であるが、1次調査も参考にすると、江戸時代前期の寛永3年(1626)後水尾天皇の行幸に備え、西へ約1町半ほど拡張されて、現在の二条城になった時の路面・溝の可能性が高い。また、南側溝6からは江戸時代末期(19世紀)の染付が出土していることから、溝さらえを行い江戸時代末期まで使用されたものと考えられる。

路面5の構築土は、6層(黒色泥砂・混砂礫 ~1cm)で大変硬く締まっており、上面には化粧用とみられる、微砂・粗砂層が薄く堆積していた。西壁では、溝際の路面を盛土して修復した

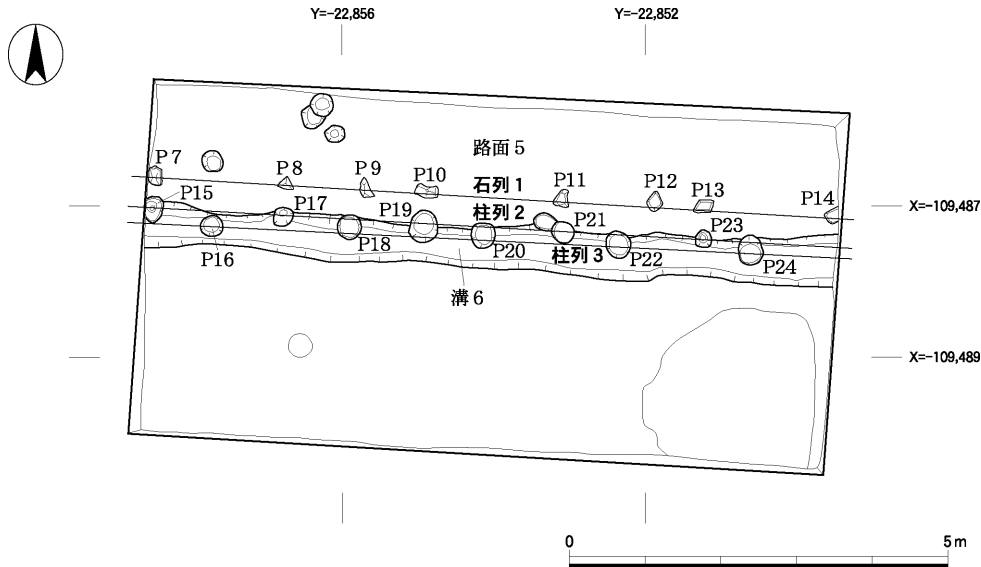


図6 第2面遺構平面図(1:100)

と考えられる黒褐色砂泥混礫層を検出し、この土層の下面から、石列1を検出した。

溝6は、路面5の南側溝である。最大幅70cm、深さ20cm、埋土は礫混じりの黒褐色砂泥で、第1面の溝4より60cm南側に位置し、現在の道路の南側溝より440cm北に位置する。

石列1(図7)は、P7・8・10・11・13・14で構成され、一辺約20cm角、厚さ10cm程の石が180cm間隔で6基5間分検出した。設置方法は、第2面の路面5を整地するとき、高さを合わせるため、一部下層の路面を掘り下げて、石上面の高さを揃えている。石の上面は、ほぼ標高約39.50mで一定である。また、その並びは第2面路面5の南端から30~40cm北側に位置し、方向軸は現在の道路・側溝とほぼ平行であった。P9・12は、石列1と関連があるものと考えられるが、間隔が異なる。石列1は、道路の境界を示すものと考えられるが、次の柱列2と対をなすものとも考えられる。

柱列2・柱列3(図7)は、溝6内北肩にて検出した。柱列2はP15・17・19・21・23で構成される。掘形の直径は25~40cm、深さは25~45cmを測り、180cm間隔で5基4間分検出した。その東西方向軸は、石列1の方向軸とほぼ同一で、石列1の南側約40cmに位置する。また、柱列3はP16・18・20・22・24で構成される。掘形の直径は約30cm、深さは25~40cmを測り、180cm間隔で5基4間分検出した。これらの柱列は、1次調査のA・B区で検出している柵列と同様のもので、二条城と道路を区画する柵または埒と思われる。P15・23は柱根が残り、P23はその先端部分を第1面で検出し、P20は腐朽した柱根の跡を第1面で検出している。柱列2と柱列3には成立時期差があると考えられるが、不明確である。

第3面(図8)では、路面25と建物4を検出した。その時期は推定の域を出ないが、路面南に溝はなく、現在の二条城の堀に面して建物4を検出しているので、1626年二条城拡張以前の路面と建物の可能性が考えられる。

路面25は、調査区全面で検出し、路面構築土の8層(黒褐色泥砂層・混礫 1~3cm)は硬く

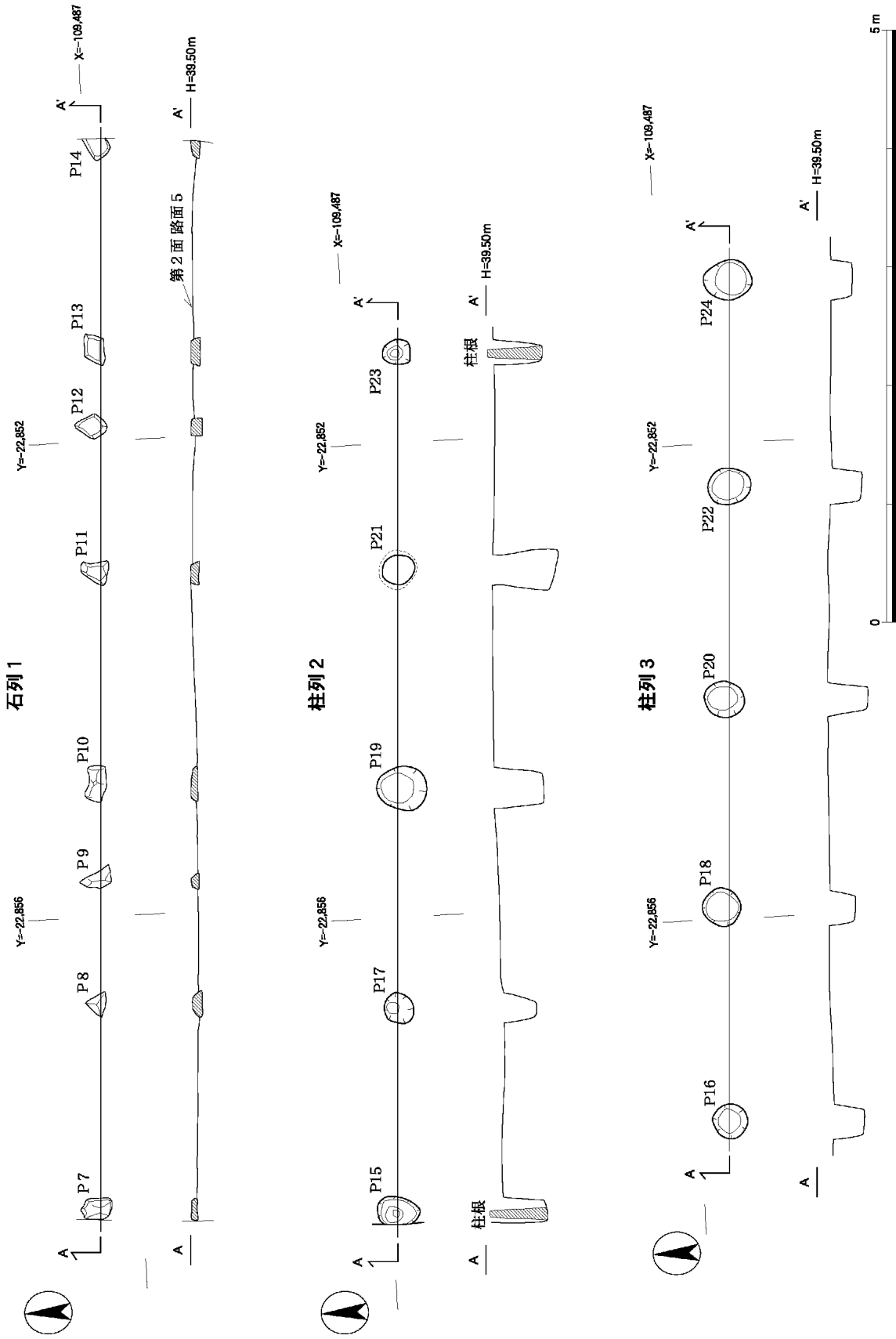


图7 石列1·柱列2·柱列3实测图(1:50)

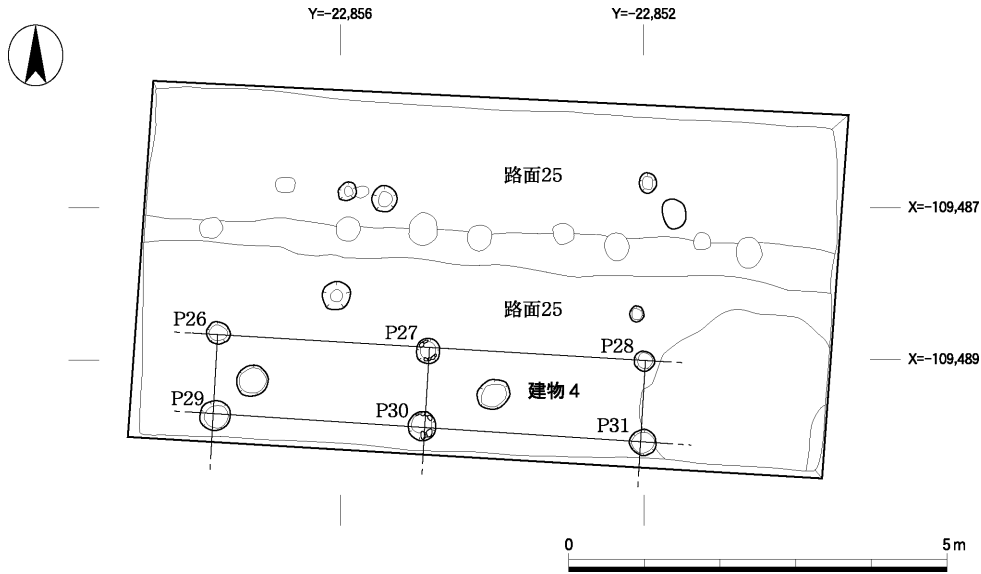


図8 第3面遺構平面図(1:100)

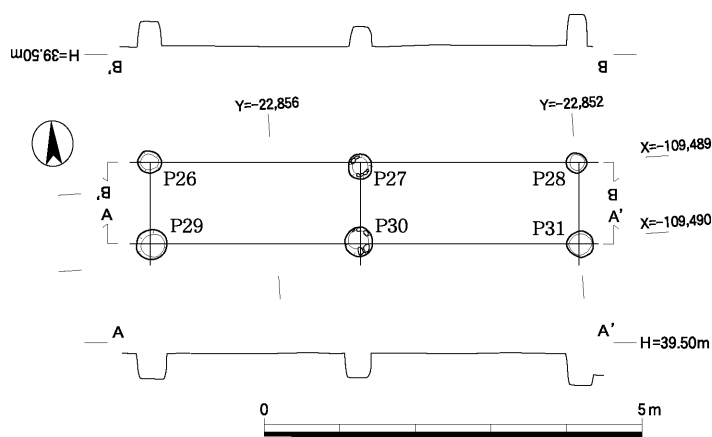


図9 建物4実測図(1:100)

締まっている。この路面は北東から南西にかけてわずかに傾斜し、その高低差は6cmである。この面で12基の柱穴を検出した。

建物4(図9)は、調査区南側のP26・27・28・29・30・31で構成され、柱穴は直径約30~35cm、深さ約20~40cmを測り、東西280cm間隔で3基2間分、南北110cm間隔で2基1間分検出した。仮設

の建物ではないかと考えられ、調査区外の東西方向と南方向に延びる可能性がある。

(4) 第4~6面(桃山時代から江戸時代初頭)

第4面では、路面32を第3面の路面25より2~5cm下層で検出した。9・10層(にぶい黄褐色泥砂・混礫 1~3cm)が硬く締まる路面で、北東から南西にかけてわずかに傾斜し、その高低差は8cmある。この面では柱穴・杭跡を6基検出しただけである。

第5面(図10)は、第3面より7~13cm下層で整地層33上面で、黒褐色砂泥層(11層)が硬く締まる。調査区南端では東西方向の溝34を検出した。埋土は黒褐色砂泥で、東西約900cm、溝幅は東壁で60cm以上、西端で140cm以上、深さ10~15cmである。11層の下層には、にぶい黄褐色砂泥層(12層)が調査区全面に、ほぼ水平で厚さ10cmほど整地されている。この面では、平安時代の瓦が多く、中世の瓦、室町時代の土師器皿が少量出土した。

第6面(図11)では、土取穴35など大小の遺構を数基検出した。柱穴状のものは1基で、大き

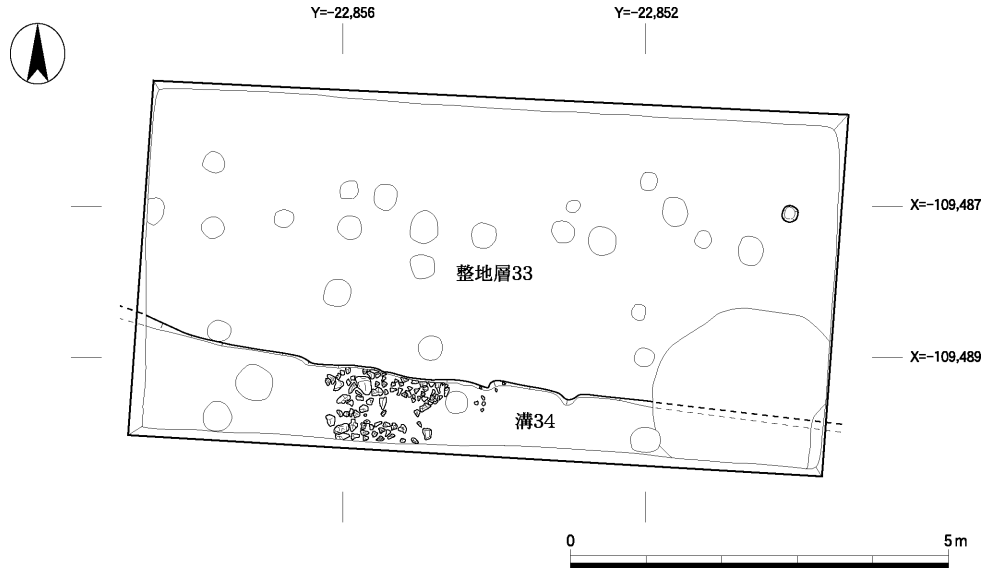


図10 第5面遺構平面図(1:100)

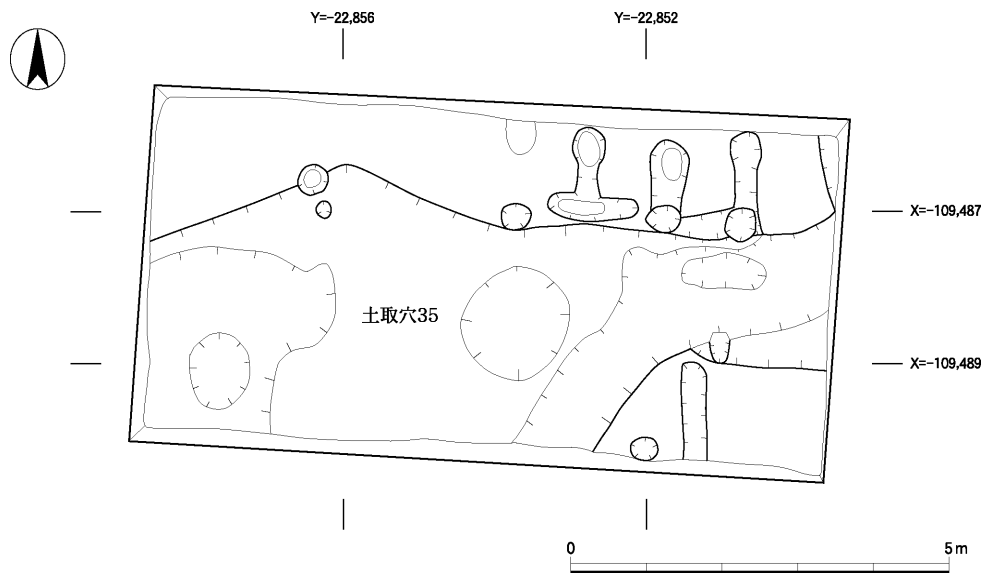


図11 第6面遺構平面図(1:100)

なものは東西900cm、南北400cm、その他は円形や長円形を呈する。粘土の細かい部分を丁寧に掘削し、ほぼ調査区全面で黄褐色粘土を掘削していることから、土取穴と考えられる。土取穴35は、調査区を北東から南西方向へ深い部分がはしり、南東部分と北側部分が小高く残る。埋土からは、平安時代から桃山時代の遺物が出土した。土器類は少なく、瓦が多く出土し、金箔瓦も1点出土している。土取穴は浅い部分で - 140cm、深い部分で - 200cmに達している。その埋め立て時期は、出土遺物からみて桃山時代から江戸時代初頭の二条城造営頃までと考えられる。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土遺物は、整理箱にして26箱分出土した。遺物の内容は、土器、陶磁器、瓦と少量の金属製品（明治時代以降の釘・針金）などである。そのうち土器類は8箱で、瓦類が18箱である。土器類のうちの4箱、瓦類のうち2箱が第1面から出土し、第2面・第3面・第4面からは細かい破片の遺物が少量出土している。瓦類は第5面で10箱、第6面で6箱出土した。

平安時代の遺物は、混入遺物として、第6面の土取穴35、第5面の溝34などから、瓦類が多く出土した。土器類は少なく、土師器（皿）、須恵器（杯・甕）、緑釉陶器（椀）、灰釉陶器（椀）、黒色土器（椀）、瓦（緑釉瓦・平瓦・丸瓦）、輸入青磁・白磁などである。

室町時代の遺物は、磨滅した遺物が少量、混入で第5面の溝34などから土師器（皿）、焼締陶器（甕）や多くの瓦類などが出土している。

桃山時代の遺物は、少量の土師器（皿）、瓦（金箔瓦）などが第6面の土取穴や第5面から出土している。

江戸時代の遺物は、路面や各遺構から出土しているが、多くは第1面の路面3構築土や溝4、溝6から出土している。国産施釉陶器（皿・椀・鉢・灯明具・土瓶）、焼締陶器（鉢・搦鉢）、染付（皿・椀・鉢）、国産磁器、棧瓦などがある。柱穴や路面から出土したものは小片が多い。土師器皿は出土していない。江戸時代末期（19世紀）の遺物が多い。

(2) 土器類（図12・13、図版4）

陶器皿（1） 灯明皿で、口径7.6cm、器高1.8cm、約1/2残存している。ロク口成形後、内面全面に透明釉をかけ、外面口縁部に釉が垂れている。内面にメアトがあり、口縁部に煤が付いて

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代～鎌倉時代	須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、緑釉瓦、瓦	29箱	軒丸瓦1点、鬼瓦1点	2箱	16箱
室町時代	土師器、焼締陶器、瓦		土師器2点		
桃山時代～江戸時代初頭	土師器、瓦（金箔瓦）		金箔軒丸瓦1点		
江戸時代以降	国産施釉陶器、焼締陶器、白磁、染付、瓦		施釉陶器4点、白磁1点、陶製五徳1点	4箱	6箱
合計		29箱	11点（1箱）	6箱	22箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を分類したため、出土時より3箱多くなっている。

いる。京・信楽系である。第1面の路面3構築土から出土した。江戸時代末期のものである。

白磁皿(2) 口径12.4cm、器高2.1cm、約1/3残存する。内面底部に龍の文様が陰刻されている。木型打込成形で、高台底部以外には、全面に透明釉がかかる。第1面の路面3構築土から出土した。瀬戸・美濃系で、江戸時代末期のものである。

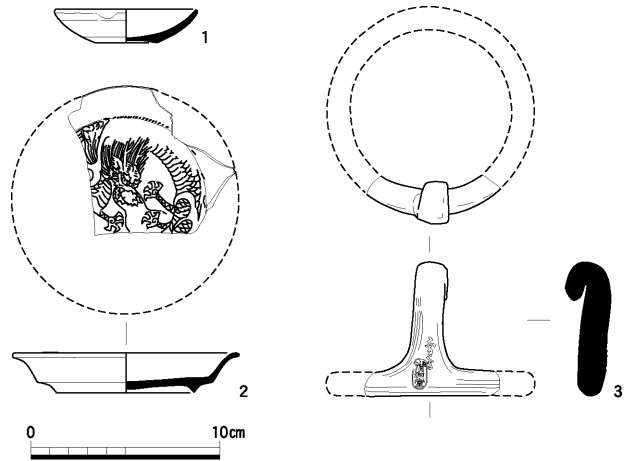


図12 路面3構築土出土遺物実測図(1:4)

陶製五徳(3) 復元直径11.0cm、

器高7.0cm、3~4脚が上を向く五徳である。脚の外面に「ふかくさ清和堂」の印刻がある。緻密な土師質の白色土でヘラ削り後、ハケで丁寧に調整している。焼成は硬い。第1面の路面3構築土から出土した。京都・深草産である。

陶器皿(4) 口径10.8cm、器高2.45cm、ほぼ完形の灯明皿である。口縁成形後、内面全面に透明釉をかけ、外面口縁部に釉が垂れている。口縁部に煤が多くついている。第2面の溝6から出土した。京・信楽系で、江戸時代末期のものである

陶器椀(5) 平椀で口径10.6cm、器高3.6cm、約3/5残存している。器高が浅く、内面中央部がやや窪んでいる。削りだし高台で、灰白色の生地に内外面には浅黄色の釉をかけ、外面下半と高台は無釉である。第2面の溝6から出土した。京・信楽系で、江戸時代末期のものである。

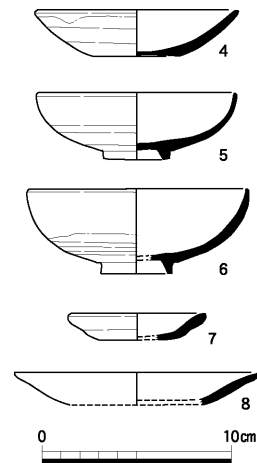


図13 溝6・整地層33出土土器実測図(1:4)

陶器椀(6) 平椀で口径11.8cm、器高4.5cm、約4/5残存している。削りだし高台で、内外面に浅黄色の釉をかけ、外面下半と高台は無釉である。第2面の溝6から出土した。京・信楽系で、江戸時代末期のものである。

土師器皿(7) 復元口径7.3cm、器高1.4cm、約1/5残存し、全体に磨滅している。体部が外反しながら外上方に延び、口縁端部を丸くおさめる。第5面の構築土整地層33から出土した。室町時代後期頃のものである。

土師器皿(8) 復元口径13.0cm、器高2.0cm、約1/10残存する。全体に磨滅し、第5面下層の構築土整地層33から出土した。室町時代後期頃のものである。

(3) 瓦類(図14、図版4)

単弁八葉蓮華文軒丸瓦(9) 箆押しが不十分なためか、中房の蓮子は不明確。花卉も不鮮明だが、輪郭線で縁取っている。珠文は2本の圈線に挟まれ、花卉に対応した位置に3個、花卉と花

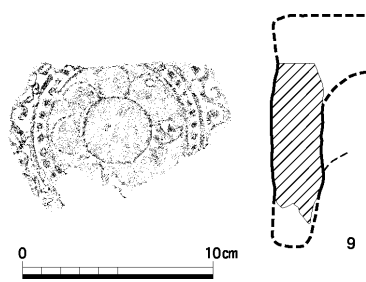


図14 軒丸瓦拓影・実測図(1:4)

弁との間に2個を置く。外側の圏線の外に右まわりに反転する唐草を配する。瓦当裏面下部は横削り。胎土には砂、小石を少量含む。焼成良好。同範の瓦が、1986年度の法勝寺跡発掘調査⁷⁾で出土している。珠文が少ないが同文の瓦には、調査地北東の1981年度の平安京左京二条二坊跡発掘調査⁸⁾や、1997～2001年度の平安京左京北辺四坊跡発掘調査⁹⁾や、大宮北山ノ前瓦窯跡¹⁰⁾から出土している。この瓦は、第5面の整地

層33から出土している。平安時代後期のものである。

金箔軒丸瓦(10) 瓦当の内・外区部分が欠損し、わずかに周縁部分のみ残存する。外径直径約19cm。周縁は幅約3cmである。この周縁部分には一部金箔が遺存している。調査地北方には、豊臣秀吉創建の聚楽第やその周囲の大名屋敷で金箔瓦が使用されていた。第6面の土取穴から出土した。桃山時代。

鬼瓦(11) 鬼瓦の一部で、鬼面文の鬼瓦と思われるが、小片のため不明確である。珠文が欠けている。縦17cm、横11cm、外縁で厚さ3.3cm残存している。型どりや貼付けでなく、鬼面を削り出して作っており、平安時代から鎌倉時代頃のものであろう。第5面の溝34から出土した。

5. ま と め

調査地は、平安時代には平安宮廡院跡に位置し、主計寮、宮内省、大炊寮、神祇官、雅楽寮などの官衙に囲まれた官庁街である。近世には、二条城を中核とした京都所司代屋敷など江戸幕府の役所などが建てられており、この地域一帯は、京都における官庁街として機能していた場所であった。このような歴史変遷を裏付けるために、1次調査に引き続き、今回の調査は、平安時代から近世にわたる時期の成果を得ようと調査を進めた。しかし、明確な遺構は、二条城造営時以降のものと考えられるもので、それ以前の明確な遺構は検出できなかった。

第6・5・4面の時期は不明確であるが、第6面の土取穴は慶長6年(1601)二条城造営を開始した時に、壁土採取のため無遺物層の黄褐色粘土を掘削し、その後、平安時代や中世の瓦、金箔瓦と共に埋め立てたものと考えられる。そして一時期整地して第5面で溝34を作り、慶長11年(1606)頃、二条城の完成時に第4面の路面32を構築し、第3面の路面25と建物4は、その後整備しなおした可能性が高い。

さらに、寛永3年(1626)には、後水尾天皇の行幸に備え、二条城が西へ約1町半ほど拡張されて、現在の二条城になったのであるが、この時に、第2面の路面5と溝6、道路境界として石列1が整備された可能性が高い。路面や溝は、補修や溝さらえを行いながら、江戸時代末期(19世紀)まで使い続けられたものと考えられる。そして、道路と二条城を区画する柵として、路面南端に柱列2・3が新設され、これらの柱は、埒として利用され、馬を繋いでいたようである。これらの柱列の中には腐食せずに残ったものもあり、明治以降も使われていた可能性がある。そ

の後、江戸時代末期から明治・大正期まで第1面の路面3と側溝4、南北溝1などが作られてきたものと考えられる。

以上、今回の調査では、路面と側溝のあり方から、江戸時代初頭以降の二条城北側の土地利用変遷が確認できた。

註

- 1) 大立目 一 『史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮神祇官・平安京冷然院跡』京都市埋蔵文化財研究所 発掘調査概報 2002-12 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 2) 田中利津子 「平安宮宮内省跡」 『京都市内遺跡発掘調査概報』平成13年度 京都市文化市民局 2002年
- 3) 高正 龍 「平安宮太政官跡」 『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 4) 南出俊彦 『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-13 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 5) 平田 泰 『史跡旧二条離宮(二条城)』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 6) 上村和直・吉崎 伸 「左京二条二坊(2)」 『昭和57年度 京都市埋蔵文化財研究所調査概要』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 7) 上村和直・辻 裕司 『法勝寺跡発掘調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
- 8) 平尾政幸・辻 純一 「左京二条二坊(2) 高陽院跡」 『平安京跡発掘調査概報』昭和56年度 京都市文化観光局 1982年
- 9) 丸川義広・能芝 勉ほか 『平安京左京北辺四坊 - 第1分冊(公家町形成前) - 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 10) 『坂東善平収蔵品目録』 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1980年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせききゆうにじょうりきゆう (にじょうじょう)・へいあんきゅうりんいんあと							
書名	史跡旧二条離宮 (二条城)・平安宮廡院跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-13							
編著者名	尾藤德行							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゆうにじょうりきゆう 史跡旧二条離宮 (にじょうじょう) (二条城)・ へいあんきゅうりんいんあと 平安宮廡院跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 たけやまちどおりほりかわ 竹屋町通堀川 にしているにじょうじょうちよう 西入二条城町	26100	A453	35度 00分 46秒	135度 44分 58秒	2004年9月 13日～2004 年11月8日	43m ²	公共下水道 埋設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡旧二条離宮 (二条城)	史跡 都城跡	桃山時代～ 江戸時代初頭	土取穴・整地層	土師器・金箔瓦				
平安宮廡院跡		江戸時代	路面・側溝・柵列	陶器・磁器・瓦		江戸時代初頭から 江戸時代末期まで の旧竹屋町通の路 面と側溝を検出		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-13

史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮廩院跡

発行日 2005年2月28日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961